

釣れ釣れなるままに

2008年思い出の釣行記 PART. 5



鹿島釣狂

### ハモ釣り

暑い夏を終えた頃、師匠の前野氏より2週続けて浜厚真方面へのハモ釣りのお誘いがあった。一度目はお断り申し上げたが、丁度釣り新聞紙上で80cmの太いハモが紹介されたこともあり、2度の誘いを受けては断るわけにはいかない。ハモを狙っての釣りなどしたことがないが、20代の頃に先輩から譲り受けた釣り道具の中にハモ釣り用のハリが入っていたことを思い出す。ハモの鋭い歯や掛かったときに体を回転させて逃れようとする習性を考えた軸の長いハリだった。釣具店でハモ釣りの仕掛けを聞くが要領を得ないので、

カレイ仕掛けのハリスに赤のビニルパイプを被せた。



午後2時に前野氏と待ち合わせて浜厚真に向けて出発し、明るい内に漁港に到着した。息子が小さかった頃、二人でイワシの大釣りをしたことのある岸壁で、沢山の人がサバのサビキ釣りをしている。そして、ここでもハモが釣れ、向いに見える発電所のフェンス前ではサバ釣りやハモ釣りで満杯だろうと言う。

漁港西防波堤の根元で竿を出している釣り人がおり、ハモ狙いだという。防波

堤先端では夫婦連れが4本の竿を出し、50mの間隔を置いてもう1名がスピンプワー2本を出していた。先週もここに来て午後7時から8時ころの間に4本のハモを釣ったということだ。その中間に入れていただく。二人そろって内側に2本、外側に1本の竿を出す。



本日は十五夜の満月なのだが薄い雲がかかっておぼろ月夜となっている。日が落ちてから、竿を揺らすアタリが何度かあったが、その主はドンコや小ゾイだった。左隣の方が、8時頃ハモを釣った。例のごと



く仕掛けに自分の身をグルグルと絡ませている。防波堤先端でもハモが上がったようだ。希望が見えて頑張るもアタリの主はやはりドンコばかりだった。私がいかに物欲しげに見えたのか、左隣の釣り人が帰り際に、その釣り上げた1匹のハモを差し出した。

帰ってからすぐに、そのハモを背開きにしてから中骨をとり、骨切りをして天ぷらにしてみる。身がフワフワとして、素晴ら

しい出来映えであった。

## 岩見沢釣遊会第7回大会（交綸会主催）

☆開催日	平成20年11月16日				
☆開催場所	八雲～森港				
☆入釣場所	濁川河口右岸				
☆釣果	カジカ	351	mm	5	
	アカハラ	324	mm	1	
	アブラコ	300	mm	4	
	重量	453	0 g		
☆成績	合計点数	1128	点	(2魚種身長+10匹重量)	
	成績	13	位		

### 貧乏人の卑屈さ

第5回、第6回大会とも私的な都合で参加することが出来なかった。第5回大会では、吉井氏が黄金道路タカエ浜で大アブラコに大タカノハをそろえて1900点台を出し、ブッチギリで優勝した。また、第6回大会は、岩見沢釣遊会創立45周年記念大会だったが、あいにくの雨模様、大時化の悪条件での闘いだっただ。そんな中、大前事務局長が井寒台でカジカとアカハラの良型をそろえて優勝した。記念大会にもかかわらず参加者が低調だったこともあり、改めて11月1日(土)に記念祝賀会をするという。私は娘の結婚式をその翌日に控えていたため、残念ながらこれも欠席することになる。

娘が結婚することになった。娘がまだ小さい頃は、キャンプがてら磯に溪流、湖沼にと連れ回し、釣りの手ほどきもした。時には一緒に海に潜って磯周りの小魚を追いかけて回したこともある。それは父親の趣味である釣りや磯遊びを通して親子の絆を深めたいとの思いからだ。また、それは「釣り」へのよき理解者を一番身近に持つことで、釣行を安泰にする狙いもあった。青磁のパーマークを付け銀白色に輝くヤマメを手にして歓声あげる姿、可愛いお尻をプカリプカリと海面に突き出しながらシュノーケルから海水をプッと吹き出す姿が臉に焼き付いている。

しかし、娘が成長するに連れて自分の趣味を音楽やスポーツの方へとシフトしていき、付き合いが悪くなった。さらに、これから旦那となるお相手も土、日と明けずに野球はするが釣りには全く興味がないようだ。願いであった婿さんと釣りに行く機会も無いことだろう。唯一残された道は娘夫婦に生まれた孫を頼りにするしかないのだが、それとて、今の娘夫婦の状況では野球やバスケットはさせるが、オヤジ臭い釣りには連れて行くといっても許さないだろう。あーあ、間もなく退職を控えてどのように釣りに行く口実を作っていけばよいのだろうか。

しかし、結婚式では泣かされてしまった。結婚式場の営業が巧みで、ドラマチックな演出が此処彼処と施されており、恒例の新郎新婦のご両親への挨拶では涙が止めどもなく流

れてくる。女房などは嗚咽が止まらず、会場から出て行こうとする有り様だ。まあ、金だけはふんだんにとられた。ついつい、その金さえあれば夢に描いたあの竿もこのリールも手に入ったのにとってしまうのは貧乏人の卑屈さ故なのだろう。

## 趣味も無い奴に仕事は出来ない。

職務と私的な用事とが重なり、第7回大会も参加できるかどうかハッキリしなくて連絡を躊躇していると、事務局長より確認の電話が入った。仕事仲間には「仕事が趣味だ」という強者もいるが、仕事が行き詰まった時にはどのように解決していくのだろうか。私は「趣味もない奴に満足な仕事は出来ない」と思っている。職務上の課題は山積みだが、自分のストレス解消が一番の課題である。大海原に自分の身を置き、豪快に竿を振ることで明日への活力が生まれてくると思うのだ。事務局長には何としても都合を付けて参加すると伝えた。

出発日前日は、早々に退勤して岩見沢に向かい、まずはカナダ屋でイカゴロ等のエサを買い込み、解凍のために自宅の地下室に放置した。冷凍庫に残しておいたパックモノのソーダーガツオやアカハラも一緒に解凍する。そして、8月の大会で余してビニル袋でぐるぐる巻にして保存しておいたマキエを取り出してみる。夏の暑い盛りを通り越して4ヶ月も経った代物である。袋を開けると嫌な匂いがする。マキエ独特の匂いとは違ったオキアミやイサダが腐ったときに出す強い刺激的な悪臭に涙が出てくる有り様だ。鼻の両方の穴にツッペをして花壇の肥料にと埋め込んだ。

出発日は比較的余裕のある中での準備だった。昼前には釣り道具一式を車に詰め込み終えて、昼飯を肴にビールを飲み、徹夜に備えてソファで横になった。しかし、釣りへの思いから目は冴えてくるばかりで一向に眠れない。何やかんやで午後8時の出発時刻が近づいてきたので、仲間と密談するために早めの午後7時には集合場所に着いた。すると仲間はもうみんな集合しており、間もなく札幌から釣りバスが着いた。本日は交綸会との合同大会なので、集合時刻を午後7時にしたというのだ。

## 他会との交流

今回の最終大会は交綸会との合同大会として組まれており、釣遊会としては初めての釣り場となる内浦湾での開催である。区間は八雲港～森港と設定された。この区間は函館までの旅路で何度も目にしていた海岸である。入り組んだ岩浜は見当たらず、変哲もない砂浜がどこまでも続いているような海岸線で、釣り場としての魅力に欠けると思っていた。しかし今回、改めて釣り場マップで確かめると砂地に玉石、岩盤帯に根原が入った磯模様で、特に晩秋のカジカ釣りではみるものがあるというのだ。

本大会は交綸会主催ということで、村岸会長の格調の高いご挨拶の後、例によって岩本幹事長より釣り場の詳細な案内があった。彼はこの海岸を熟知しているのか地図も見ずに好ポイントから最近の釣り情報までを念入りに説明してくれた。さらに、本人は釣り場範



囲の最初の方で下りたかったらしいのだが、不案内な釣遊会会員のために終点の森漁港まで下り口等を案内すると付け加える。しかし、懇切丁寧な案内を頂いた上に釣り場まで案内してもらうわけにもいかず、その申し出を辞退することにした。

私の座席の横には南氏が座っていた。彼も釣り場に非常に詳しい。先週の医釣会の大会では濁川でカジカやソイをそろえて3位になったらしい。そして濁川のアカハラはこの付近では一番大きかったと付け加えられた。先週は荒れた天候で濁川も例外ではなく、波が高い状況の中で根掛かりばかりを繰り返しながらの成績であった。「今日はべた風状態なので濁川周辺はどこでもやれるだろう。ロープに気をつけろよ。沖に向かって斜めに入っているんで、仕掛けを取られる恐れがある。暗い内は分からないと思うがロープの先にボンデンが浮いているので注意深く確かめてから釣りをするように。」と丁寧に指導していただいた。そして南氏には、仕事と家族と釣り、フェロモン入りのコマセ、釣れた3杯のタコ、身長賞を取ったタカノハ、銭函のカンカイ50cmなどの楽しい話でバスの中を和ませて頂いた。

## 濁川右岸

様々な情報を頂いて、当初の予定通り濁川河口右岸でバスから降ろしていただく。私が最後だった。

民家の横を通り抜けて海岸に向かっていくと、沖に突き出た消波堤の横で竿を出している御仁がいた。仲間と来たのだが釣果がカジカ3匹と思わしくないので引き上げるところだという。厚かましくも獲物を見せていただけませんかというが断ら



れてしまった。そして、自分が思い描いていた場所とは様子が違うように思ったので尋ねてみると、ここは濁川の左岸だと言う。川の手前で降りてしまったらしい。

もう一度、重い荷物を担ぎ直して右岸に向かう。なるほど南氏が話していたように倒れた大きな看板があった。その横から防潮堤を下りる。しかし、狙っていた場所には先行者（磯釣り会）が竿を出していた。彼に様子を伺ってからその左に30mほど離れて竿を出す。予報より波が高く、ウネリも入っており、比較的落ち着いた何度かの波の後に大きな波がザンブリコー、ザンブリコンとやってくる。アカハラを狙っての近投は無理で中投と遠投とにする。しかも、中投の竿にはゴミがまとわりついて団子状になってくる。遠投は途中のハエ根に仕掛けを取られる。南氏が「午前3時までは全く釣れず、その後に魚が来た」と言っていたので、何とか粘ろうとするが限界である。右の方に様子を見に行くと、波が少し治まっているところがあったので移動しようとするが先行者に先を越されてしまった。河口の方に様子を見に歩いてみるが更にひどい状態である。先行者が何度か私の状

況を聞きに来てくれるがボンズだと告げると、彼もあきらめて港に向かうと言う。

3時半、波が比較的治まっている右の方に移動してみる。ここは比較的根掛かりも少ないようだ。潮回りが上げ7分という絶好の時機になったためだろうか、30cmほどのアブラコが来た。その後もアブラコに混じってカジカがポコンポコンと来るが25cmほどの小物ばかりだ。何とか規定の10匹には届いたところで夜明けを迎えてしまった。竿3本とも2本バリで遠投を中心とする。小気味よく竿先が入ってアブラコより少しマシなアカハラが釣れた。そして、35cm程のカジカも釣れた。

沖合100m地点に、満潮時からわずかに頭を出していた岩礁があった。釣り場マップの紹介ではその周辺がアブラコの狙い場で、エラコをエサに遠投すれば良型が狙えるとある。そこに移動してみたが、私の遠投力ではやっと半分を超えたあたりで失速してしまいポチョンと落ちてしまう。全く情けない。入れ替えも出来ないハゴトコ1匹が来ただけで8時半には荷物を片付けて国道に上がった。

### 審査結果

優	勝	畑 雅史	1815点 (アブラコ435mm+カジカ 407mm+7730g)	山	越
準優	勝	岩本 満	1750点 (アカハラ401mm+アブラコ365mm+7390g)	山	越
3	位	南 勝	1598点 (アブラコ376mm+コマイ 373mm+6490g)	山	越
4	位	阿部雅美	1582点 (アカハラ417mm+アブラコ403mm+5620g)	山	越
5	位	前野達志	1579点 (アカハラ419mm+カジカ 359mm+6010g)	野 田 生	
身長優勝		村岸省三	43.5cm (アカハラ)	山	越

本日の濁川は波が高かったが、山越では風で釣果が上がったようだ。そして、次から次へと山越組の交綸会のメンバーがカジカやアブラコの大物を提出した。カンカイも黄色みを帯びて実に旨そうである。アカハラも大物が上がった。過去5回の合同大会では幾分、釣遊会に分があったのだが、今回は、交綸会に軍配が上がった。

私は、1128点 (カジカ351mm+アカハラ324mm+重量4530g) で13位という不本意な成績であった。2008年は、第5回、第6回と欠席してしまったが、年間成績に絡む5回の大会に参加することができて年間でも5位に食い込めたのは、まあまあ満足できる成績だと思っている。

長万部で昼食をとった後は、皆ぐっすりと眠り込み、洞爺湖畔でトイレタイムだった。満々と水を湛えた洞爺湖、翻ってみると稜線に雪をたたえ、半分雲に隠れた羊蹄山の幻想的な勇姿を望む。釣り大会の復路は見慣れた海岸線なのだが、このような風景を堪能できるのも合同大会ならではのことだ。来年も一緒に釣りをしましょうと固い約束を交わして今回の大会を終えた。



本日の入賞者。

後列左から 身長賞：村岸省三、4 位：阿部雅美、5 位：前野達志  
 前列左から 準優勝：岩本 満、優勝：畑 雅史、3 位：南 勝

#### 【平成20年岩見沢釣遊会年間成績】

優勝：嵐 光博 10点 (①②③6②4②)  
 準優勝：堀内正博 19点 (②⑥②9⑥③50)  
 3 位：前野達志 19点 (⑥5010③③⑥①)  
 4 位：吉井 博 21点 (99④⑧①②⑥)  
 5 位：鹿島釣狂 21点 (③③⑥②5050⑦)